

## 日本の印象寸描—見たまま、思いつくまま

「日本で仕事をしています」と私がいうたびに、相手はちょっとポーズをおく。彼等にとっては、日本というどうもまだく異国情緒豊か、あるいは神秘的な」という風に映って、オリエントの魅惑を垣間見るようなのである。日本的ということがまだ人々の心を揺さぶるのである。何故だろうか。この国に何年か暮らしてみてもよく自問する羽目になる。時には日本はそれほど異なった国なのだろうかと思う時もある。基本的にいって私は普遍主義者だが、人間はすべて究極的には情熱・欲望・感動などといったもので動かされる。もちろんこういった人間の基本的衝動は、文化の違いによってそれぞれ異なった顔をもっている。たぶん日本ではそのような情緒は公衆の前では隠され、外部には感情を出さない表情、いってみれば歌舞伎での〈切り詰めた演技〉にみられるような形となる。そこではすべてが効率的でさっぱりしており、そして時計の動きのようなきちんとした動作を見せる。時間や行動範囲の関係でどうしても視点が限られることになる観光客のようなアウトサイダーが面と向かうのは、この効率の部分であり、ソニーのイメージも精緻な工芸品の扇子や絵画また歌舞伎・能といったものとの釣り合い上〈不思議〉の中に入れられてしまうのである。

だからといって、これが真の日本といえるのだろうか。一つのカルチャーを評価し理解するには人々のもつ警戒心を取り払ってから観察すべきである。そうすることによって、そこにでてくるのが昔の日本の魅力をまだ幾らか残している小さな飲食店、道端の屋台、小さな雑貨店などという日本である。巨大産業が経済を支配している先端工業国の一つであるこの国が自営業の多くの個人になおも生計の資を提供しなければならないという

ことには驚きを感じるが、これは多くのことを伝えている。世界中のどこの自営業者も自己の業務には大きなプライドを持っているものである。自分達が提供する製品・サービスの品質にその生計がかかっているからである。また、そのことが著名な日本のデパート業界の名だたるサービスを世界に提供するために、小事業所がこれまで受け継いできた代々の伝統であるともいえよう。

このこととも関連すると思われるが、もう一つの日本の特色といえるものは、活力のある数多くの中小都市が巨大都市の逆らえないほどの吸引力に対抗する片方の磁力として作用していると思われることである。県内にあるこういった中小都市の生存力というか成長力が、地方の強力な牽引力・魅力・独自性といったものの存在を示しているようである。現に地方産の食器類・工芸品などが観光客を特に引きつけるものとなっている。世界では、日本のように陶器とか手作りの紙製品や銅製品などを特産とする町を現在も残している国は今や殆ど影をひそめている。地方独特の伝統工芸が日本を訪問客にとって興味ある国にしているのである。

殆どの文化社会では食が結構なビジネスを創り出すものであるが、非常に多くの産業が食べ物に関係している日本では特にそうであり、小さなレストランや飲食店の数や種類の多さが先ず訪日客を驚かすことにもなるし、また日常の飲食を楽しむ過ごすようにするサービスの質の良さが驚きの対象ともなる筈である。

我が家から歩きながら私が眼にするのは、商店主達が自分達の店に続く道端を掃いている姿である。このようにコミュニティが所有する財産を大切にする熱心さはおそらく典型的な日本の特色

国際連合アジア太平洋統計研修所

所長 S. アナンダ・ミーガマ

といえよう。自分達のコミュニティーを大事にすることは、人間が安住できる場所が限られる山岳国で生きるために、小さな区域に何百万人かが共に生きなければならない日本人に強いられるのだという人もいるが、同じような地理的圧力を受けながらそういったコミュニティーの道徳がみられない社会もあるのである。

今日の社会学の通念としては、日本社会の中の個人に見られるように、個人というものはより大きな共同体の必要性の中に包み込まれることになるが、この種のモデルの原型ともいべきかの有名な「サラリーマン」なるものをよく知れば知るほどさらにもっと複雑な姿が浮かび上がってくる。

私がかねがね日本人が、チェスよりもっと複雑で単なる線型理論的思考よりも勘による手腕に訴える方が強いゲームである碁に大きな興味と資質を持っていることに驚嘆の眼差しを向けている者である。

日本人は、季節季節に花々の盛りを觀賞するためには千里の道も厭わないといわれているが、恐らく北斎や広重といった浮世絵に馴染んだ人々が、隣国中国を除けば日本が富んでいる景観美のすばらしさを満喫しようということだろうか。

すべての人々が一樣に感銘を受けるのは、日本の街々に見られる〈平穏〉ではなかろうか。お互いの関係に亀裂が入る前あるいは争いが起こる前に何とか対立を治めようとする幅広さが社会を貫いていることを如実に反映していると思われる。(米国では、一年間に日本の雇用者総数以上にあたる法律専門家が誕生しているからといって驚くには当たらないことだが。)しかしながら、最近の地下鉄での困った暴行沙汰の発生は、特に教養ある青年達の真剣な問題を指摘しているようである。

工業化後の社会にあって今や日本は精神的危機に直面しているというのであろうか。「パンのみにて生くるに非ず」だが、日本にとっては新たな感動、新たな環境、さらに多くの物品を休みなく求め続けるということが今や満たされてしまったということだろうか。

バブル経済の全盛時代の経済成長がブームであった数年間、若者達の関心の的は何らかの刺激、金銭的欲求、外国旅行などであったが、バブルの崩壊と長引く景気停滞によって神経の苛立ちが露呈されることになった。そのため、今日ベストセラーになっているのは神秘的・靈感的傾向をもつ書籍類といわれている。より深い真理を求め、精神的探索を求める渴望の声も上がっている。日本は再び根源に戻ろうとしているのではなかろうか。つまり、西欧の工業化後の精神的探求に〈禪〉を通して大きく貢献した一つの文化が今や自からの生い立ちの再発見を迫られることになっているのである。

昔の日本に在った〈静穏・晴朗〉は、かの旅の俳人 松尾芭蕉の次の俳句

「白菊の 眼に立てて見る 塵もなし」

によって最も忠実に捉えられているが、新しい世代も、この菊花の国のコンピューター時代に求められる〈平静さ〉を今一度探求することになるのであろうか。